






学位審査結果報告書

| | | | | | |
|---|--|------|----------|-----|-------|
| 学位申請者名 | Hermann Kimo Boukamba | 学生番号 | 27049004 | 専攻名 | 観光学専攻 |
| 論文題目 | Developing a Generalized Approach to Tourist Ethnocentrism (GATE) to Investigate Effects on Tourist Destination Image | | | | |
| 論文審査及び最終試験の成績（表記は合格又は不合格とする。） | | | | 合格 | |
| <p>審査委員会</p> <p>主査 <u>大井 達雄</u> </p> <p>委員 <u>Joseph M. Cheer</u>  </p> <p>委員 <u>Keir Reeves</u>  </p> <p>[論文審査の結果の要旨]</p> <p>本論文は、エスノセントリズム (Ethnocentrism : 自民族中心主義) の概念を観光学研究に応用し、デスティネーションイメージに及ぼす効果を測定するための指標の作成、ならびに実証分析を行うことを内容としている。具体的には、エスノセントリズムは自分たちの文化を基盤とし、その他の文化に対する価値判断をする考え方を意味する。民族学の分野で研究が行われ、最近では心理学やマーケティング研究への応用がみられている。また観光学研究でも注目されている分野である。</p> <p>これまでの観光学におけるエスノセントリズムの研究成果として、自国内の観光地に対する肯定的なイメージ (アイデンティティや帰属意識) が取り上げられる一方で、他国の観光地においてはある種の軽蔑に近い概念での理論整理がなされている。またインタビューを中心とした質的研究が存在するものの、量的研究に関しては十分に行われていない。</p> <p>そこで本論文では、エスノセントリズムを量的に計測するための方法論として、Generalized Approach to Tourist Ethnocentrism (GATE : 観光客の民族中心主義への一般化アプローチ) という測定尺度を開発し、同時に GATE の妥当性、信頼性や頑健性について、南アフリカ諸国の住民を対象にデータを収集し、分析を行い、その解釈だけではなく、方法論としての実現可能性について検証を行っている。そのため、本研究の観光学における学術的意義は大きいものである。</p> | | | | | |

以下では、本論文の内容について概略を説明する。本論文は大きく6章から構成されている。序論は第1章、理論分析は第2章と第3章、実証分析は第4章と第5章、結論は第6章にそれぞれ対応している。

第1章の序論は、研究の背景、主要専門用語（エスノセントリズムや観光行動など）の定義、先行研究の整理や現状の研究水準の把握、課題の整理、研究の目的、研究デザインやアウトライン、学術的貢献の内容などが記述されている。先行研究の整理として、社会科学におけるエスノセントリズムの測定尺度を取り上げ、消費者行動論に基づく尺度[Consumer Ethnocentrism Tendency Scale(CETSCALE)や[Consumer Ethnocentrism Extended Scale(CEESCALE)]と、それ以外の尺度[Fascist Scale (F-Scale), California Ethnocentrism Scale(E-Scale)や Generalized Ethnocentrism(GenE) Scale など]に分類し、それぞれの特徴について紹介している。

第1章の内容として、主に1980年代中期以降から行われている消費者理論におけるエスノセントリズム研究をベースとして、研究背景、課題の整理、研究の目的やデザインを記述することによって、本論文の研究ギャップを明らかにしていることに特徴がある。

理論的背景の記述においては、まず第2章で概念的拡張を行っている。具体的には、1980年代中期以降の消費者行動理論で展開した社会経済学的アプローチへの偏重を問題視し、さまざまな課題を整理することで、観光学への応用を図ることを内容としている。具体的には、観光学におけるエスノセントリズム研究の課題として、文化的理解の欠如、観光客の国内経済状況の把握の欠如、アウトバウンド観光における観光地の選択の予測手法の欠如、観光客のエスノセントリズムの評価能力の低さなどの課題が提示された。それらの課題の対処方法として、多文化に対する認知手法の統合や心理学的評価機能の導入を提案している。その上で従来の評価手法とは異なったGATEを開発し、その概念モデルについての説明を行っている。

第2章の成果として、エスノセントリズム研究を観光学研究に拡張したこと、さらに従来のエスノセントリズム研究の限界を、先行研究の整理から明らかにし、同時にそれらを解決するための評価尺度であるGATEを開発し、その概念について明らかにしたことがあげられる。

第3章(Paradigm Shift & Application)では、第2章の理論整理を踏まえて、観光学においてGATEの利用範囲を拡大することを目的としている。旅行経験のモデルとして、従来型のアプローチではGATEに適用することが困難であるため、旅行経験に対する新しいアプローチ(Inbound Approach to Travel Experience : IATE)を提唱した。それによって、既存の測定尺度であるGenEの応用を通じて、GATEの使用が可能となった。次に観光学における方法論的結合(Methodological Bridge)を実現している。自殺観光の最新の議論を踏まえ、共創、グローバリゼーションや仮想現実の概念をGATEに取り入れている。同時に観光現象への分析の拡張を行っている。これらの理論的な裏付けに関する議論を精緻に行うことによって、本論文で開発されたGATEが4章以降の実証分析結果の信頼性を保証することが、第2章と第3章の学術的貢献となっている。

実証分析においては、まず第4章では改良型 GenE Scale を使用して多次元解析を行い、因子構造や計量心理学的結果の把握を行ったうえで、新しいモデルを構築した。データとして、南アフリカ共和国プレトリア地区の住民に2段階で対面型構造化インタビューの結果を使用している。具体的な調査項目として、被調査者の属性、アウトバウンド観光の経験、エスノセントリズムの水準、GenE Scale の改良版による設問数が22問（5段階リカート尺度）などとなっている。まず22問のデータを使用して、まず探索的因子分析を行った。その結果、3つの因子が抽出された。各計算結果から第1因子を文化的偏見、第2因子を個人的偏見と命名したが、第3因子については分析から除外した。因子分析の結果として妥当性や信頼性については一定の基準を超える結果となった。

次に共分散構造分析を行った。上記の因子分析の結果から得られた2つの因子と、調査で得られた意欲的イメージの3つのデータを使用して推計を行った。最初に意欲的イメージが文化的偏見や個人的な偏見によって影響されるのかを分析した結果、いずれの因子もマイナスに有意な結果を示した。さらに文化的偏見と個人的な偏見の2つの因子からエスノセントリズム因子を作成し、その因子が意欲的イメージに影響を与えるかを分析した結果、同様にマイナスに有意な結果を示した。適合度指標についてもそれぞれの水準を満たす結果を示した。これらの2つの結果からGATEの評価尺度としての信頼性と妥当性が明らかになったことが第4章の成果である。

第5章では、第4章の成果を踏まえて、文化的距離とエスノセントリズムの水準の2つの視点から、観光地の認識的イメージ、感情的イメージ、ならびに意欲的イメージにおけるエスノセントリズムの影響を分析することを目的としている。第4章で使用したデータに加えて、再度データ収集を行った。前回で収集したデータは観光地としてジンバブエを対象としていたが、今回は観光地として日本を対象としている。調査回答者は前回と同様、南アフリカ共和国プレトリア地区の住民であり、ジンバブエと日本の観光地としての違いを文化的距離の変数として使用している。その他の調査項目は前回と同様である。

第4章と同様に2つのモデルで共分散構造分析を行った結果、ジンバブエについては、文化的偏見と個人的偏見の2つの因子が、3つの因子（認識的イメージ、感情的イメージ、ならびに意欲的イメージ）にマイナスに有意な結果をもたらしていることがわかった。特に感情的イメージの係数が高い数値となった。またエスノセントリズム因子においても同様の結果を示した。日本については、ジンバブエの結果とは異なり、文化的偏見と個人的偏見が3つの因子にプラスに有意な結果をもたらしていることがわかった。一方でエスノセントリズム因子においては意欲的イメージのみプラスに有意な結果をもたらしたが、認識的イメージと感情的イメージについては統計的に有意な結果はみられなかった。適合度指標についてもそれぞれの水準を満たす結果を示した。

上記の結果はそれぞれ被調査者全体を対象とした結果である。次に被調査者をエスノセントリズムの水準に区分し、同様の分析を行った。その結果、エスノセントリズムの意識の高低が必ずしも明確な差をもたらすことはなかった。

実証分析の結果から、第4章についてはGATEの尺度指標としての信頼性は証明されたものの、第5章の共分散構造分析の結果については、当初想定していた仮説を十分に検証することはできなかった。その理由について検討し、指標の改善や他地域での実証分析等を通じて研究の改善を図ることの必要性が記されている。

第6章の結論では、第1章から第6章までの内容を要約し、同時に本論文の学術的貢献、ならびに今後の課題や展望について触れられている。学術的貢献については、エスノセントリズム研究を観光学に理論的に応用させただけでなく、同時に実証分析研究への道を切り開いたことがあげられる。実証分析については予想された結果も一部認められたが、課題も存在する。今後も方法論やデータセットの改善などを通じて課題の解決が望まれるが、博士論文として観光学に一定の学術的貢献をもたらしたことは間違いない。

以上が論文の内容であるが、同論文については、審査委員から以下のようなコメントがなされた。

- ・本論文は時宜を得たテーマであり、研究課題の適切さ、方法論的枠組みの一貫性については評価されるものである。
- ・観光学におけるエスノセントリズム研究は目新しくはないものの、アフリカへの応用は新規性がみられる。
- ・章・節構成については冗長の箇所がみられ、より簡略化が可能ではないか。特に節については再整理が必要である。
- ・観光行動の範囲の広さから考えると、GATEにおいて考慮すべき変数は少なく、他の因子を取り入れる可能性を検討すべきではないか。
- ・第6章の結論は興味深く、知的に高尚であるものの、一部の箇所で説明不足の点がみられる。

上記のような意見が出たものの、審査委員会の総意として、本論文が和歌山大学大学院観光学研究科の博士論文としての水準にあることが確認された。

[最終試験の結果の要旨]

上記で出たコメントを中心として、最終試験では質疑や討論がなされた。その結果、以下のような修正箇所の提案が審査委員から行われた。

- ・ 要旨や序論などにおける記述として、時制の統一を図ること。
- ・ 章・節構成の再検討、同時に名称の簡略化。
- ・ 定義や概念の記述が少ないので、説明をさらに加えること。
- ・ 先行研究において一部の内容が不足しているので、適宜加えること。本論文では文化的な視点を基盤としているにもかかわらず、主要な文献が取り上げられていない。
- ・ 実証分析における前提条件や仮説との関係性の記述が少なく、解釈については後付けのような印象を有するので、修正すること。
- ・ 実証分析の結果について論文においてさらに説明を加えること。同時に、要約や序論の文面をより分かりやすく書くことや前半部分の理論的記述の再整理を行うこと。
- ・ 論文において、文章表現と文体の統一性を図ること。

上記のように、主として審査委員会の意見としては形式面での修正が中心であり、最終試験終了後に一部の修正が行われた。後日再提出され、章構成の修正、先行研究や補足説明の追加などの修正が行われたことを審査委員会で確認し、博士（観光学）を授与するに相当と判断した。